

町小だより

令和7年
6月25日
No. 698
御免町小学校

見付けた連絡帳

校長 土田 利康

少し前に、自宅の書斎を掃除しました。書斎と言えば聞こえは良いのですが、実際には物置となっている場所です。一念発起して、家を建ててから一度も開けたことのない実家から持ってきた箱に手を付けました。すると写真アルバムやレコード、カセットテープなどの中から小学校5年生の時の連絡帳を見付けました。ページを開いてみると、「ガリ版」で毎日担任の先生が手書きした内容が載っていました。その日の出来事やテストの結果、子ども一人一人のめあてなど丁寧な文字で書かれていました。(若い人たちは知らないかと思いますが、ガリ版《謄写版》とは、明治時代に生まれた簡易印刷機のことです。鉄製のヤスリ板を下敷きにロウ原紙を載せ、その表面に鉄筆で文字を書き、引っかいたことによりできた小さな穴からインクが押し出されて文字が印刷できるものです)

連絡帳に目を通すと、40 数年振りに様々なことが思い出されます。5月2日に野球のバットが額に当たり3針縫ったこと。運動会の鼓笛隊で中太鼓を担当したこと。6月26日に水害があり休校となったこと。夏休みの自由研究で釘の錆び方を調べたこと…。

また、古かった木造校舎の様子も蘇ってきました。裸電球が3個しかない体育館、ノートを買った渡り廊下の購買、長屋のように連なった汲み取り式の便所、光沢が出て重厚感があつた階段の手摺。ほかにも石油ストーブの煙突の継目にあつた蓋が外れて教室中がすすだらけになったことや、2階でバケツをひっくり返し、下の教室が雨漏り状態になったことも思い出しました。薄汚れたノートは、期せずして「玉手箱」となりました。

当時、教室の片隅の机の上に「ガリ版」の一式が置いてありました。いつ書いていたかは思い出せませんが、先生は30人分の連絡帳一冊一冊にローラーでインクを擦り付け、ページを開いて乾かしていました。そのインクの匂いが私は好きでした。コピー機が無い時代ですから、相当な手間暇が掛かっています。しかし、手刷りだったにも関わらず、印刷はページの罫線と平行で曲がっていません。文字は小さいけれども、一つ一つ読みやすく癖がありません。「字は人を表す」とは、正にこのことでしょう。先生は小柄で年配の女性でした。真面目で几帳面、厳しさと優しさの両面を持った方でした。手作業で印刷された連絡帳からは、先生の性格や子どもに対する愛情、そして付随する情景や背景もにじみ出てきます。

近年、各種便りや通知表などは、手書きではなくなっていました。時代の流れから、これはやむを得ないことでしょう。しかし、たとえ手書きでなくても、教師の言葉の重みやその背景にある温かみは、変わらず大切にしたいと思います。先生の教えを受け、受け取る相手の表情を想像しながら心を込めて作成するよう心掛けたいと思います。

